

胡振華：「キルギス共和国の 東干語、中国語教育の研究」

犬塚 優 司

本稿の目的は、胡振華『吉尔吉斯斯坦共和国的东干语、汉语教学研究』を紹介することにある。¹⁾

この論文は、2000年7月中華人民共和国北京市で開催された「中国少数民族双语教学研究会第九届学术研讨会暨首届国际双语教学研讨会」において発表されたものである。この「中国少数民族双语教学研究会」は中国少数民族のバイリンガル教育について研究しているもので、今回初めて「国際双语教学研讨会」として国際シンポジウムを開催したものである。

この論文の筆者である胡振華は、1931年中国山東省青島市に生まれ、1953年中央民族学院（現在の「中央民族大学」）語文学部ウイグル言語文学系を卒業後、中央民族学院でキルギス語学文学、チュルク諸語言語学、中国イスラム文化等の教育と研究に従事し、現在中央民族大学ウイグル・ハザク・キルギス（維哈柯）言語文化系教授（博士生导师）である。また、中央民族大学東干学研究所所長、中国突厥語研究会副会長、中国少数民族双语教学研究会顧問、キルギス共和国国家科学科学院名誉院士でもある。

東干語は、日本では、橋本萬太郎(1957a,1957b,1957c,1974a,1974b,1977a,1977b,1977c,1989)²⁾により、紹介されている。キルギス共和国独立以後の東干語の状況を知る上で、この論文は有用である。

この論文において、胡振華は、まず「キルギス共和国³⁾内では、キルギス人、ウズベク人、カザフ人、東干人、ウイグル人、タタール人等の民族の大多数は二つの言語を用い、彼らはみなロシア語と本民族の母語を用いるが、東干人の状況は更に少し複雑で、彼らが人口が少なく各地に分布しているため、ロシア語と東干語を使用するものもあれば、ロシア語、キルギス語、東干語を使用するものもあり、またロシア語、ウズベク語、キルギス語、東干語を使用するものもある」(p.1)と、東干人の多言語併用状況を説明している。

この論文で、キルギス共和国の中国語教育研究の概要を述べるにあたり、二つの課題に分けて紹介を進めている。「一つは、東干人（回族）⁴⁾の言語教育研究の状況を介绍すること」(p.2)であり、「一つは、キルギス共和国の高等教育機関での中国語教育研究状況

を紹介すること」(p.2)である。

胡振華は、この論文の中で、「東干 (Dun'gan)”は、中央アジアの、キルギス共和国、カザフ共和国、ウズベク共和国に住む少数民族の呼称で、ソ連が 1924 年に民族の識別を行ったときに確定された一つの族名である。彼らは 19 世紀後半に我が国⁵⁾西北回民が蜂起に失敗した後、移り住んだ陝西、甘肅、新疆の回族の後裔である。当時一万人前後だったものが、百数十年経つうちに、10 万人前後に発展している。キルギス共和国内に 4 万人以上、カザフ共和国に 4 万人以上、ウズベク共和国に一万人以上が住んでいる。彼らは今なお自らの中国語陝・甘方言の特徴的な母語と、多くの我が国西北地区回族人民と同じ生活習俗を保持している。キルギス共和国において、東干人は主にソフルウ (騷葫芦)⁶⁾、イルドゥク (額尔德克)、ミリャンファン (米梁川)、ホンチィ (紅旗)、カント (坎特)⁷⁾、イヴァノフカ (伊万诺夫卡) 等の村とビシュケク (比什凯克)⁸⁾、トクマーク (托克玛克)、カラコル (卡拉考勒)、オシュ (奥什) 等の都市に分布している。」(p.2) と東干人の概要を説明している。

また、「東干語は中国語の一支である。東干語研究は中国学の一構成部分に属する。旧ソ連の学者 A.A.Dragnev 教授とある東干学者は、東干語は中国語を来源とするが既に発展して一つの単独の言語となっていると考えている。私は、時間と空間の原因により、一定の変化が見られ、何らかの特徴を形成しているが、それはなお中国語の地方方言に属しており、主に我が国国外の中央アジア東干人居住区で使用されている一つの中国語の陝・甘変体であると考えている。私がこれを中国語の陝・甘変体と呼ぶのは、それが本来中国語の陝・甘方言であるが、中央アジアに移ってから 120 余年が経過し、ロシア語及び中央アジアのチュルク諸語の影響下において、言語の中に一定の変化が発生し、それによって東干語のなにがしかの特徴が形成されたものであるからである。」(p.2) と述べている。東干語を独立した一つの言語と見るか、それとも、中国語の一方言と見るか、この点が、従来のソ連・ロシアの研究者と大きく見解が異なるところである。この問題は政治的な問題も含み、中国人研究者にとっては、中国語の方言と見なしたい気持ちは十分に理解できるが、ロシアやキルギス共和国の研究者にとっても、譲れない部分であろう。

続いて、現在の中国語の陝・甘方言と異なった、東干語の特徴を、音声面、文法面、語彙面から取り上げている。

音声面については、「中国語の陝・甘方言には、顫音 [r] が無いが、東干語の音体系中には [r] 音が増えており、アラビア語、ペルシャ語、キルギス語、ウズベク語、カザフ語、ロシア語の [r] を語頭に伴う借用語の中に多く出現する。語末では r 化音として読まれることが多い。」(p.2) と指摘し、具体例として「radio ラジオ (ロシア語)、rayon 区 (ロシア語)、ruh 靈魂 (アラビア語)、ramazan ラマダン (イスラム教暦の九月)

(アラビア語)、rawap ラワブ (弦楽器) (ペルシャ語)、baza(r) バザール (市) (ペルシャ語)、Trakto(r) トラクター (ロシア語)」(p.2) を挙げている。

文法面では、「数詞についてロシア語と中央アジアのチュルク諸語の影響を明らかに受けている。」(p.3) ことを指摘している。

まず、「一万以上の基数の数詞が中国語の陝・甘方言と異なる」(p.3) ことを、「1000 - yiqian 一千 2000 - erqian/liongqian 二千/両千 40000 - sishiqian/siwan 四万 90000 - jiushiqian/jiuwan 九万 100000 - yibaiqian/yishiwan 十万 300000 - sanbaiqian/sanshiwan 三十万 8000000 - bamillion 八百万 (million 百万) 85000000 - bashiwumillion⁹⁾ 八千五百万」(p.3) という例を挙げて説明している。中国語の四桁毎の数の表し方に対して、三桁毎の数の表し方があることを指摘したものであり、特に百万以上は、“baiwan”ではなく、“million”を用いているところは注目に値する。また、「“千”の前に“个”を加えることもある。例：lionggeqian 两个千(2000)等」(p.3) ことを指摘している。

次に、「分数も中国語の陝・甘方言と異なる」(p.3) として、次のような例を挙げている。「1/2は“二分之一”とは言わず、“liongferlitoudi yifer 两份里头的一份”と言う。85%は、“百分之八十五”とは言わず、“bashiwu protsent 八十五普劳参特(百分之……)”と言う」(p.3)。なお、“里头”とは「中、内部」という意味である。

第三に、「序数についても中国語の陝・甘方言と異なる」(p.3) として、次のような例を挙げている。「5月1日 - chuyidi May(初一的“May”五月) 3月8日 - chusandi Mart(初八的“Mart”三月)」(p.3)。中国語では、日付を月日の順で用いるのが、東干語では、“di”という要素を挟むものの日月という順になっているところは、注目に値する。

第四に、「量詞の中の“个”が次第にその他の単に量詞に取って代わる趨勢にある」(p.3) ことを指摘し、「yi ge shu 一个树(“颗”と言うこともできる) yi ge futou 一个斧头(“把”と言うこともできる) yi ge ren 一个人」(p.3) という例を挙げている。

語彙面について、「今日の中国語の陝・甘方言との差異が大きい」(p.3) ことを述べている。

第一に、「陝・甘方言で今日既に用いなくなったが、過去にかつて用いていた語を保存している」(p.3) ことを指摘し、「“领导人(指導者)”を“头子”と言い、“政府(政府)”を“衙门”と言い、“副手(助手)”を“帮办”と言い、“商店(商店)”を“铺子”と言い、“路费(旅費)”を“盘缠”と言う等する」(p.3) と例を挙げている。

第二に、「元々の語を基礎にしていくつかの新語を創造している」(p.3) ことを述べ、「“飞机(飛行機)”を“风帆”と言い、“学者(学者)”を“科学人”と言い、“作家(作家)”を“写家”と言い、“出版(出版)”を“出了世的”と言い、“人民(人民)”を“民人”と言いうなどする」(p.3) と例を挙げている。

第三に、「大量のロシア語と中央アジアチュルク諸語の語を吸収している」(p.4) こと

を指摘し、「mashina 自動車、機械（ロシア語）、partiya 党（ロシア語）、komitet 委員会（ロシア語）、naren 肉うどん（キルギス語）、komuzi コムズ（弦楽器）（キルギス語）、palo 焼きめし（ペルシャ語）、nan ナン（ペルシャ語）」(p.4) の例を挙げている。

文字については、「東干人は20世紀の20年代、まず中国に居住していたとき民間に使用されていた所謂“小経（消経）”のアラビア文字に基づいて、一種の東干文（計35字母）を規範化した。このアラビア文字を基礎とした東干文で書き、記録した。1928年、ソ連はいくつかの民族の文字のローマ字化改革を進め、東干人もその後、ローマ字の東干文（計31字母）を制定した。1932年、この東干文を使って歴史上初めての東干人新聞『東火星』が創刊され、学校で用いる東干語教材及びその他の政治、文芸読み物も編集出版された。1953年東干文はまた改革され、キリル文字を基礎にした東干文（計38字母）に改められ、この文字を用いて、大量の東干語教材及び一般書籍、また多くの辞書などの工具書が編集出版された。キルギス共和国国家放送局には東干語放送番組が増設されている。」(p.4)のように概要を述べている。なお、文字改革については、橋本萬太郎(1957a,1957b)が詳しく述べている。その中で「1957年には、待望の新聞Шы й Ү ә д и Ч и『十月の旗』が刊行された」¹⁰⁾とある。

東干語の教育については、「東干語が正式の文字を持って以来、東干語文の教育は東干人が多く住む村落の小中高等学校でずっと進められているが、全ての教科書が東干語文で編集されているわけではなく、全ての課程は基本的にみなロシア語教材を用い、ただ小学校一年から卒業までの各学年に毎週何時間かの東干語文課が設けられており、中学校高等学校においても東干語文課はなお継続して設けられている。東干人の大学はないので、東干人の大学生が大学において、もし東干語文を学びたいれば、語文学科で特別に東干人学生のために設けられている東干語課を受講できるだけで、キルギス共和国の大学には東干語専攻はない。」(p.4)と現状を紹介している。また、東干語文に関する教材について、次のようなものを挙げている。(p.4)

- Bugazov, H. B., Duvaza, B. R.: "Shizikue" (識字課、一年生用) 1993年
- Sushanlo, M. Ya., Shinlo, L.: "Fumu yūyan" (父母のことば、一・二年生用) 1991年
- Bugazov, H. B.: "Huizu yūyan" (回族のことば、二・三年生用) 1991年
- Bugazov, H. B., Yusurov: "Fumu yūyan" (父母のことば、三・四年生用) 1962年
- Shisir, I. S.: "Fumu wenxūe" (父母の文学、四年生用) 1991年
- Imazov, M. H.: "Huizu yūyan" (回族のことば、四年生用) 1987年
- Imazov, M. H.: "Huizu yūyan" (回族のことば、五年生用) 1992年
- Imazov, M. H.: "Huizu yūyan" (回族のことば、五・六年生用) 1983年
- kalimov, A., Tsunvaza, Yu.: "Huizu yūyan" (回族のことば、六・七年生用) 1993年

Sushanlo, M. Ya.: "Zamudi wenxue" (私たちの文学、七・八年生用) 1989年

Imazov, M. H.: "Huizu yuyan" (回族のことば、九・十年生用) 1981年

Havazov, Ya.: "Zamudi wenxue" (私たちの文学、九・十年生用) 1982年

橋本萬太郎 (1977a) は、「東干人学校では、国語の時間だけ、教育が東干語で行われ、六年生まで読本 $\Phi y m y \quad \dot{Y} Y \dot{y} n$ (『父母のことば』) と文法 $\text{Ж у н - я н} \quad \text{Х у а}$ (中には $\text{Х у э й з ъ} \quad \text{Х у а}$ 『東干語』) をもちい、八年生まで $\text{З а м у д и} \quad \text{В ы н ш} \quad \text{Y э}$ (『われわれの文学』) という形で、民族語教育がおこなわれている¹¹⁾ と述べている。ここで挙げられた教科書が、橋本萬太郎のいう教科書と同じであるかどうかは定かではない。

東干研究について、「ロシア人学者の東干人研究は19世紀末に始まったが、その言語についての研究は20世紀の20年代末から30年代にやっと始まった。1932年、キルギスタン民族文化科学研究所に東干研究室が設立され、東干語についての計画的な研究が始まった。比較著名な学者にはソ連の著名な漢学者がいる。A.A.Dragunov、彼の代表的な著作に『東干語』(1940年)がある。Dragunovよりやや早くに Palivanov があり、彼の代表的著作には『東干語の主要特徴』などの多くの原稿(1936年)がある。また、東干人である A.kalimov、Yu.Yanshansin、M.H.Imazov 等が東干語研究に貢献している。」(pp.4-5) と概説し、主な著作を次のように紹介している。(p.5)

1. Yanshansin, Yu.: 『東干語ロシア語辞典』(ロシア語) フルンゼ 1968年
2. Yanshansin, Yu.: 『東干語の甘粛と陝西の方言』(ロシア語) フルンゼ 1938年
3. Yanshansin, Yu.: 『東干語トクマーク方言』(ロシア語) フルンゼ 1968年
4. Yanshansin, Yu.: 『中原語簡易文法』(東干語) フルンゼ 1957年
5. Yanshansin, Yu.: 『中原語の書き方』(東干語) フルンゼ 1960年
6. Imazov, M.H.: 『東干語正字法』(ロシア語) フルンゼ 1977年
7. Imazov, M.H.: 『東干語語音学』 フルンゼ 1981年
8. Imazov, M.H.: 『東干語詞法綱要』 フルンゼ 1982年
9. Imazov, M.H.: 『東干語句法綱要』 フルンゼ 1987年
10. Imazov, M.H.: 『東干語語法』 ビシュケク 1993年
11. 『ロシア語-東干語辞典』(三巻本) フルンゼ 1981年

また、各国の研究者として、オーストラリアの Svetlana Rimsky Korsakoff Dyer や日本の橋本萬太郎、ドイツの Heinz Riedlinger 等の名前を挙げている。中国における東干語研究について、「我が国においては、杜松寿先生が早くも50年代に東干語文についての翻訳紹介をし、私の恩師である傅懋勳先生、王均先生も研究したことがあった。1955年~1957年、中央民族学院が招聘したソ連の研究者 G.P.Serdyuchenko 通訳院士¹²⁾ が、語文系言語学研究クラスの学生・研究者たちに詳細に東干文及びその制定経過を説明した。私もかつ

ていくつかの文章を書いて、東干語、東干学者とその研究状況等を紹介した。」(p.5) と簡単に紹介している。

キルギス共和国における東干学の研究機関について、「キルギス共和国国家科学院東干学研究部は、1954年に設立された東干文化研究室を母胎として発展してきたものである。既に亡くなった Susanlo, M.Ya. 通訳院士がかつてこの研究部の主任であったが、現在の主任は Imazov, M.H. 博士であり、研究部は歴史・民俗研究室と言語・文学研究室に別れ、職員は11名である。」(p.5) と述べている。また、胡振華の所属する中央民族大学の研究機関について、「中央民族大学は1999年初めて東干学研究所を設立した。主要なメンバーは、私、王振忠と丁宏、海淑英、海峰など数名であり、東干語に関する研究活動を行っている。」(p.5) と紹介している。これは、恐らく中国国内で唯一の東干学を研究する機関であろう。

次に、この論文の第二の課題である、キルギス共和国高等教育機関で行われている中国語の教育研究の状況について、「キルギス共和国独立以前、その中国語教育研究ないしは中国学研究は、主に先に述べた東干語及び東干学研究であり、中国語普通話及びその他の関係課題についての教育研究は少ないものであった。少数の中国語を学習する人は、キルギスタンの高等教育機関で学ぶのではなく、多くはモスクワ、チタ、ウラジオストク等の高等教育機関で学んだのである。共和国独立後、国立キルギス大学東方学科とビシュケク(比什凯克)市人文大学東方学・国際関係学科に中国学専攻と中国語課程が設立された。国立師範大学、イシククル(伊塞克庫勒)大学、ナリン(納仁)大学及びその他の大学にも中国語課が解説された。現在、キルギス共和国では、中国語学習ブームが出現している。」(p.5-6) と概観している。

更に、「国立キルギス大学には四名の中国語教員がおり、内一名は北京外国語大学を退職したロシア語教員で、三名は中国語を学んだキルギス人教員であり、38名の学生が中国語を学んでいる。あるものは中国学専攻の学生であり、またあるものは経済専攻で中国語を学ばなければならない学生である。ビシュケク(比什凯克)市人文大学の中国語教員も多くはなく、責任者は Vladimir Lui Ganovich 先生であり、その他の何名かの先生の中には中国語専攻を卒業したばかりで大学に留まっているキルギス人青年教師もおり、また臨時に招聘された我が国の客員研究者が代わりに授業を行っていることもある。学生は、一年生から五年生まで合計116名である。これらの大学で使用されている教材は、多くは我が国の北京語言文化大学と北京大学が編集したテキストである。キルギス共和国の各大学にはまだキルギス人が中国語を学ぶための中国語テキストは編集されていない。中国語教育法及び中国語関係の問題についての研究にまではまだ構っておられず、教育の任務をかるうじて完成させることができている状況である。聞くところによると現在キルギス共和国では中国語短期学習クラスがずっと開設され、每期三ヶ月、300米ドルで、登録して学

習する人はとても意欲的であるのことである。」(p.6)と述べており、キルギス共和国の高等教育機関における中国語教育は、現在様々な問題を抱えながら進められていることを窺い知ることができよう。

最後に、胡振華は、自身が1999年8月、キルギスタン共和国で、キルギス共和国国家科学院名誉院士の証書を受けた際、キルギス共和国教育大臣 Bekbolotov Tursunbek 教授が「中国文化センターを設立できるよう希望している。中国語の教授、中国文化の紹介の他に、中国の改革の経験を紹介し管理部門の人材を養成することを希望している」(p.6)ということ述べている。また、キルギス共和国で発行されている“Zaman (『時代』)”紙の2000年4月7日第7面に、Aman Saspayev 先生により「象形文字はいくつあるのか」という題で書かれた文章の中で、「特に中国語教育の重要な意義を強調して、更に中国語教育を重視し、教育設備を拡充し、教育方法を改良し、中国語の教育レベルを向上させる必要がある」(p.6)と述べていることを紹介している。そして、「我々が中国語の教員、教材等の面においてキルギス共和国の中国語教育活動に対してある程度支援できることを希望している。もし仕事を離れることができるならば、私もキルギス共和国に赴き、一中国語教師となることを、一人の中国キルギス友好の道をつける人となることを希望している」(p.6)と、この文章を結んでいる。最後のことばから、胡振華のキルギス共和国における中国語教育に対する熱い気持ちを感じないではいられない。

注

- 1) 2000年8月胡振華先生を訪ねた際、この論文を日本語に翻訳し、日本の研究者に紹介するよう依頼を受けた。しかし、本誌では既発表論文の翻訳を掲載することができないので、胡振華先生の同意を得て、「書評」の形で紹介することとした。したがって、本稿は一般的な書評とは異なる形になっている。
- 2) 橋本萬太郎(1957a,1957b,1957c,1974a,1974b,1977a,1977b,1977c)については、橋本萬太郎著作集刊行会編(1999)所収のものによった。
- 3) この論文の題名から分かるように、胡振華は「吉尔吉斯斯坦共和国(キルギススタン共和国)」という名称を用いている。しかし、外務省のホームページ「世界の国一覧」(http://www.mofa.go.jp/mofaj/world/ichiran/i_nis.html (2001年1月5日))にしたがって、「キルギス共和国」の名称を用いる。なお、必要に応じて「キルギスタン」という名称を用いた。
- 4) 橋本萬太郎(1977c, 1999, p.603)によれば、東干人は、かつて“Жунъянジュンヤン(中原)”と自称していたが、1958年以降、“Хуэйзүй(回族)”と自称しているとのことである。
- 5) 胡振華は中国人であるので当然「中国」のことである。

- 6) 各都市の日本語の読みは、橋本萬太郎 (1977a,1999,p.602) にあるものは、それによった。ただし、首都ビシュケクは、外務省のホームページ「世界の国一覧」(http://www.mofa.go.jp/mofaj/world/ichiran/i_nis.html (2001年1月5日)により、「ビシペーク」を採用しなかった。
- 7) 橋本萬太郎 (1977a,1999, p.602) には、「カント」は、ミリャンファン、ホンチイを包括する県のレベルの地名として挙げている。
- 8) 1991年、フルンゼが改称され、古い名称ビシュケクに復した。
- 9) 原文では“basiwumillion”とあるのを訂正した。
- 10) 橋本萬太郎著作集刊行会 (1999) p.605。
- 11) 橋本萬太郎著作集刊行会 (1999) p.605。
- 12) 科学院やアカデミーのメンバーの称号。

参考文献

- 亀井孝、河野六郎、千野栄一編 (1988-) : 『言語学大辞典』 (三省堂)
- 橋本萬太郎 (1957a) : 「ジュンヤン語とその文字 1」 (『中国語学』 No.58, pp.13-18)
- 橋本萬太郎 (1957b) : 「ジュンヤン語とその文字 2」 (『中国語学』 No.67, pp.193-99)
- 橋本萬太郎 (1957c) : 「ジュンヤン語とその文字 3」 (『中国語学』 No.68, pp.220-32)
- 橋本萬太郎 (1962) : 「ジュンヤン語 (ソビエト・ドゥンガン語) 研究書目解題」 (『言語研究』 Vol.41, pp.66-81)
- 橋本萬太郎 (1973) : (書評・紹介) “КРАТКИЙ ДУНГАНСКО-РУССКИЙ СЛОВАРЬ, ТОКМАКСКИЙ ДИАЛЕКТ ДУНГАНСКОГО ЯЗЫКА” (『言語研究』 Vol.60, pp.74-78)
- 橋本萬太郎 (1974a) : 「東干語研究集成 1」 (『中国語学』 No.220, pp.19-32)
- 橋本萬太郎 (1974b) : 「東干語研究集成 2」 (『中国語学』 No.221, pp.16-33)
- 橋本萬太郎 (1977a) : 「東干語をたずねて (1) 東干族とその言語」 (『月刊言語』 Vol.6, No.4, pp.96-104)
- 橋本萬太郎 (1977b) : 「東干語をたずねて (2) 東干語の類型地理学的特徴」 (『月刊言語』 Vol.6, No.5, pp.102-10)
- 橋本萬太郎 (1977c) : 「東干語をたずねて (3) 東干語の声調と音韻分析の現実性」 (『月刊言語』 Vol.6, No.6, pp.83-92)
- 橋本萬太郎 (1989) : 「東干語」 (亀井孝、河野六郎、千野栄一編『言語学大辞典』第2巻 世界言語編 中 pp.1410-12)
- 橋本萬太郎著作集刊行会編 (1999) : 『橋本萬太郎著作集』全3巻 (内山書店)